なだいなだ

娘の学校

中公文

中公文庫 ©1973

娘の学校

昭和四十八年九月十日初版
昭和五十二年七月二十五日八版

著者 なだいなだ

発行者 高梨茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二丁目一番地
振替東京二一三四

定価はカバーに表示してあります

中公文庫

娘の学校

なだいなだ著

中央公論社

挿画・カット　柳生弦一郎
表紙・扉　白井晟一

目次

校長訓示　7
調子はずれ音楽教室　24
指導にならないと言われそうな読書教室　45
作家になることを思いとどまらすための文学教室　61
若者と年寄りのための政治教室　79
憂いを増させるための人生論教室　99
穴居人的心情を求めての人類学教室　117
ヒューマニズムと非条理の教室　137
ニキビと落書きの教室　156

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

観念的な性教育教室　176
ノーベル賞のことわり方を考える作家教室　196
健康を鼻にかけさせぬための狂気論教室　213
あとがき　231

娘の学校

【校長訓示】

世界は大きな学校であり、東大など
というちっぽけな学校とは、くらべ
ものにならぬ大きさの学校である。

四人の娘ども、私は、これから、お前たちの校長を勝手に名乗ることにする。お前たちは、生まれた時から、この学校に入学した。世界という大きな学校である。私は校長のつもりであるが、お前たちは、はじめっから、私をいじわるな上級生ぐらいにしか思っておらぬであろう。しかし、そんなことは、どうでもいい。

デカルトは、『方法序説』という本の中でこう言っている。

……世界という大きな本……旅をすること、冒険的航海や遠征の軍を見ること、異なった風俗や条件の中で生きる人々をたずねること、いろいろな経験をつむこと、運命に身をゆだね、自分自身を試練にかけること……。

そう、私は、ほかならぬ、この世界という大きな本を教室とも教科書ともして、お前たちを教えて行くつもりである。

この学校では、いいことも、悪いことも教えられるであろう。校長としての私は、特別悪いことを教えようと思っているのではないが、生徒はけしからんことに、学校で、先生の教えないことを学んでしまうものだからである。だから、悪い生徒が出来ても、全部が校長の責任ではない。

三女の千夏は、今、六歳であるが、学校にはじめて行った日、帰って来ると、「今日、学校で何を習って来た」とたずねた私に言ったものである。

「おい、お前さん、今、何てったの」

れっきとした父親の私をつかまえて、目玉をぐりっとまるくして、そう言ったのだ。

「こら、何だ、父親をつかまえて、お前さんとは」

私は叱った。

「お前さんじゃ気にいらないか。じゃ、おとっつぁん」

何たることであろう。学校で最初におぼえたのが、こんなわるふざけであるとは。

だが、千夏は、学校で先生からこんなことを教わったのではない。いたずらっ子の同級生から教わったのである。先生に責任はない。私は、世の教育ママたちのように、「学校は、いったい何を教えてるんでしょう」などと、学校を責めたりしない。学校とは、そういうところでもある

と思っているからである。私自身、小さい時、手におえぬいたずらをして、両親に、

「いったい、学校で何を教わってるのだ」

と何度も叱られたものだ。そのたびに、私は、先生や学校を弁護したい気持になったものだ。わざわざ月謝を払って行かせる学校ですら、こうなのだ。私の、この月謝も不要な学校で、子供たちが、勝手につまらぬことをおぼえたとしても、校長としては、責任をとるつもりはない。

そもそも、子供の行動の責任を、学校にばかり押しつけるところが、日本には多すぎる。つい、しばらく前のことであったが、東大生と慶大生が金庫ドロボーをしてつかまった。すると、新聞には、「大学教育に欠陥がある」というような談話が、いくつものせられた。私は、そうした談話を耳にすると、やれやれ困ったものだと思う。

大学は、物をとるな、人を殺すな、などということを教えるところではない。そもそも、大学まで行かねば、物をとるな、人を殺すな、ということが、わからないようでも困るではないか。そういうことは、学校で習うことではない。それらは、社会の掟であり、社会が教えこんで行かねばならぬものだ。家庭でのしつけも大切だが、それだけでも足りぬ。

末っ子の美樹は、まだ二歳にならない。この末娘が、ある日、突然に、理由もなく、何もしておらぬ私を、ものさしで、ポカポカとなぐりはじめた。いったい、何事であろうか、と思ったが、それは、あのテレビという、いまいましいものの影響なのであった。

エンタープライズ号の佐世保寄港で、三派系全学連と、警察機動隊とが衝突した。毎日、ニュ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ースのたびごとに、その光景がうつし出された。私は、その時、ある週刊誌にたのまれて、佐世保に取材に行っていた。私の姿が、やじ馬の間にまじって、テレビ画面に現われはしないか、という期待もあって、留守の家人たちは、ニュースというニュースの時間にテレビをつけたのだった。その結果、美樹は、警棒を持って、やったらめったらに、相手かまわずポカポカとなぐる警官を、まねするようになった。もちろん、美樹は、三派系の全学連もまねた。部屋中を、ワッショイ、ワッショイと叫んで、ジグザグに走りまわり、素手で、突然、私にぶつかって来たりするのだ。

困ったことである。これで、家庭のしつけが悪いなどと言われるのでは、やりきれぬではないか。

上の三人の娘たちも、テレビを見ていた。家人の報告によると、十歳、八歳、六歳の上の三人の娘は、テレビの前で、

「学生、ガンバレ、おまわりさん負けろ」

と三派系の学生の応援団になったらしい。しかし、決して、わが家では、偏向教育などしていないのである。何か、子供に悪い点があると、すぐ学校や先生や家庭の責任を問題にすることが、いかに無意味であることか、これでわかったであろう。

私が校長であるこの娘の学校を、お前たち娘たちが卒業することは、ないだろうが、卒業せぬまでも、生徒の行為について、すべての責任を持つことなど、とうてい出来ないのである。

その点では、政治家も、学校だけの責任のような顔をしてもらわないようにお願いする。総理大臣が、「小骨一本も抜かせません」などと言って、小骨どころか魚まですててていて、小学生のウソが、どうしてとがめられよう。ウソを平気で言い、汚職を平気でする政治家が、「テレビの俗悪番組が、青少年に悪影響を与えている」などと叱るのは、どう考えても、無責任なことである。

私は、今、校長として、仕方なく訓示をたれているのであるが、お前たち生徒が、そろそろ飽きはじめているのがわかる。それに、本当は訓示をたれるなど、がらにもないことなのだ。だから、そろそろ訓示はおしまいにするが、その前に一つだけ、話しておくことにする。

それは、私のヒゲのことである。

私は、しばらく前から、ヒゲをのばした。お前たちにとっては、私がこう書いても、別に不思議に思われぬであろう。しかし、私は校長として、教えねばならぬことがある。それは、この「ヒゲをのばす」という日本語的表現である。お前たちの知っているフランス語では、同じ場合に、「レッセ・プッセ」つまり、「のびるにまかせた」と言う。こちらの方が論理的である。のばそうと思っても、本当は、自分の自由にならない。自由に出来ることは、剃ることの方である。少し文法の話になって悪いが、日本語の表現「ヒゲをのばす」では「のばす」は他動詞であり、ヒゲは目的補語である。主語は私である。かくして、ヒゲは、主語の意のままになるものと考え

られがちだ。

私は、私の顔をヒゲつきのものとしてからというもの、会う人々に、

「いったい、どうして、どんな理由で、ヒゲをおのばしになったのですか」

という質問を浴びせられて困惑したのであった。正直に言うと、夏休みの間、ちょっと不精をして、ヒゲを剃らなかったのだ。すると、ヒゲをのびるにまかせたら、自分の顔は、どんなに見えるであろうか、という興味が湧いた。

これは、人間の生まれながらにして持つ、変装本能というものが、なせるわざである。誰でも、もし変化出来るのなら、姿を変えてみたい気持を持っている。床屋や美容院が、人間の社会で繁盛するのは、その本能に支えられているためである。この変装という行為は、人間の歴史の中でも、小説や物語の主題となって、手を変え、品を変えて繰返されて来た。童話や伝説を読むと、魔女によって動物に変えられた話が、何と多いことかに、驚くことだろう。そこには、変りたいという願いと、変ることに対する不安が、いりまじっているのだ。推理小説の中でも、名探偵や名ドロボー（名ドロボーというのは、ちょっと変だが）は、この変装の術を、飽きもせず使っている。この飽きもせず、というのが、大切なところだ。

だが、出発点はそうだったが、それから、いろいろな要素が加わった。お前たち娘どもは、ヒゲがのびて、変な顔になった私を見て、

「パパ、ヒゲ剃らないでえ」

と言うようになった。

かくして、私には、今度は、ヒゲを剃る自由が、なくなったのである。実のところは、そうなのであった。だが、人々は、私に、かくさずに、本当の理由を言えとせまった。それ故、私は、それらの質問者を納得させるために、もっともらしい理由を、あれこれ考え出さねばならなかった。これは、大変に難しいことなのである。

なかには、驚くほど勘のいい人がいて、

「私には、わかっていますよ。あなたが、なぜ、ヒゲをのばしたんだか。ズバリ、当ててあげましょうか」

と言った。そして、意味ありげに、ニヤニヤ、あるいは、エヘラエヘラ笑うのであった。それは、私を気味悪くさせた。私が、まだ考えついていない理由を、他人があててしまうなんて、タイムマシンで、未来と過去を自由に行き来する人間でなければ、出

来ない筈ではないか。

それらの人々は、私に何か願いごとがあるにちがいないことにしたし、また、私の細君、つまり、お前たち娘どもの母親の、要求によるものだとした。たしかに、フランスには、

接吻する男にヒゲなきは、チーズなき食事のごとし。

という格言がある。だが、正直に告白すると、私の鼻の下の毛は濃く、しかも、どういうことか、あらゆる方向に無統制にのびること、まさに、戦後の日本社会の縮図のごとくであった。しかも、けしからぬことに、その中のあるものは、重力の法則に従うこともせず、無政府主義者のごとくに、なんと上向きにのびていた。そして、手で、くしで、なでようと、なでつけようと、手や、くしが離れるとたんに、ピンともとにもどるのであった。それ故、顔を寄せ、近づくと、それらの反逆者たちは、相手の鼻のあなの中に侵入して、くしゃみをよびおこすのである。かくして、私の細君は、嘆息して、

「これは、チーズなき食事でなくて、コショウを入れすぎた食事のごとしだわ」

と、祖国の祖先たちの作った格言を訂正しなければならなかった。

そのようなわけで、私は、いろいろ、考えられる理由を探した。

「最近、女性は、なんでも、男をまねするようになりましたのでねえ。ズボンをはく。髪は短く

する。仕事の面でも、男のやれることを何でもやるようになる。酔っぱらって、くだをまいたり、たんかをきったりするところまで、男そっくりの女性が、現われるようになりました。

ところでです。私は、くやしくても、女にどうしても、まねの出来ぬことは、何だろうか、と考えたのです。それが、このヒゲです。くやしくったって、これを女性がまねることは出来んでしょう。どうです。やれますか」

私は、そう言って胸をはったこともあった。

長女の由希は、私と猫の顔を見くらべて、

「パパ。パパのヒゲは、猫のヒゲみたいに、横にのびるのねえ」

と、いささか侮蔑的なことをのべたことがあったが、私は、その時も平然としていることが出来た。

「馬鹿。くやしかったら、どんなヒゲでもいい、のばしてみろ」

私は、そう言うことが出来たからである。これには、わが家の女族どもは、困ったらしかった。

「そもそも、男って、ヒゲなんか生えるなんて、ネコなみねえ」

などと、反撃の姿勢を示すことがあったが、それは負けおしみを出ぬことがわかっていたので、私は、それを聞いても、泰然自若、ニタリとするだけであった。

しかし、その理由を聞くと、日本語の感覚に鈍い人があって、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com